上宮寺通信

第六十九号

檜皮色（ひわだいろ）の小袖

今年は『源氏物語』の作者・紫式部が主人公の大河ドラマが放送されています。

たびたび和歌を詠む場面が出てきますが、平安時代から鎌倉時代にかけてはことあるごとに和歌が詠まれていました。当時の人々は、歌には不思議な力があり、心を込めて歌をよめば、その願いは神仏に聞き届けられると信じていたのです。そのため権力争いなどの政争の道具となったこともありました。

その時代を生きた親鸞聖人も和歌に対する教養は当然あったと思われます。しかし、ご自身ではあまり詠まれることはありませんでした。『親鸞聖人正明伝』にはこんなエピソードが書かれています。

親鸞聖人が比叡山で修行をされていた28歳の頃、師の慈円僧正とともに朝廷内裏へと招かれました。そのとき慈円僧正は後鳥羽上皇の前ですばらしい和歌を披露されました。上皇やその周りにいた家臣もみなその才をほめたたえておられました。

すると上皇が「その者は誰か」と慈円僧正に仕えていた親鸞聖人のことを尋ねました。「日野有範の息子で範宴（＝親鸞聖人）と申します」と紹介されると、「叔父の日野範綱も和歌の名人である。師の慈円僧正もこんなすばらしい歌を詠めるなら、範宴もそうであろう。歌を作ってみよ」と命ぜられたのです。

「鷹羽雪」という題をいただき、親鸞聖人は即興で「箸鷹（はしたか）の　みよりの羽風（はかぜ）　ふきたちて　おのれとはらう　袖の白雪」と詠まれました。皆が「さすが慈円の弟子である」と称賛し、上皇より褒美に「檜皮色の小袖」をいただいたのでした。

しかし、そのとき親鸞聖人は「もし上手く歌を詠むことができなかったならば師の慈円僧正や叔父の日野範綱の名も汚すことになってしまっただろう。これからもたびたび内裏に招かれ、このような思いをしないといけないのか…」と、世俗にかかわるすべてのことが疎ましく感じられるようになり、比叡山を下りる決意をされたのです。

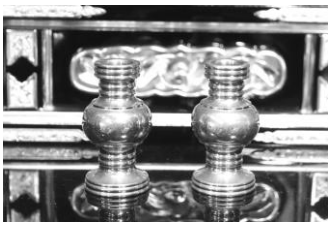
親鸞聖人はこのときの出来事を終生忘れることはありませんでした。ですから和歌を詠まれるということもしなかったといわれています。

83歳のときの親鸞聖人のお姿を描いたとされる「安城の御影」には胸元に赤色の着物が描かれています。これは褒美としていただいた「檜皮色の小袖」を表しているといわれ、比叡山を下りるきっかけとなったこの出来事を象徴的に自画像の中に描かせています。

「お内仏（仏壇）のどこに水を供えればいいですか？」と聞かれることがあります。

浄土真宗では茶器やコップに入れて水をお供えすることはありません。華瓶という仏具がありますので、その中に水を入れ、樒（しきみ）などの青木を挿して、御本尊の前の上卓に一対で置きます。色花を挿すことはありません。

樒を挿すことで水が香るとともに腐りにくくなり、八功徳水といわれる浄土の香水を表しているのです。



◆話題あれこれ

○4月16日に予定されていました名古屋東照宮の舞楽祭は雨が予想されたため前日に中止が決定し、今年も行われることはありませんでした。コロナ禍で3年間中止となり、4年ぶりということで稽古にも熱が入っていたのにとても残念でした。舞楽装束を新調したため少しの雨にも濡れてはいけないということで東照宮宮司さんも断腸の思いで中止を決定。来年は晴天のもと開催できるように願っています。

○前回の防水工事から10年以上が経過したため、本堂の屋上部分の防水工事を4月下旬に行いました。同時に廊下の壁紙とカーペットの貼り換えも行いました。少し雰囲気も変わり気分も一新いたしました。

○新型コロナの自粛気分も終わり、どこかへ出かけたくなる5月です。ついつい無理をして体調を崩さぬようお気をつけください。

○公式ＬＩＮＥの友だち登録をよろしくお願いします。ＬＩＮＥから法事などの法要や仏事のわからないことの相談もできます。

上宮寺公式アカウント

LINE

友だち登録よろしくお願いします。

【雑感】

なんとも今年のドラゴンズはファンを一喜一憂させてくれます。開幕カードのヤクルト戦で一つも勝てず今年もダメか…と落胆させられたと思えば、その後6連勝をするなど、8年ぶりに単独首位へ。今年は優勝が期待できるぞ！と喜んだ途端に5連敗とまた落ち込ませてくれます。でも、こういう気持ちになるのも期待が高い証拠。どうでもいいやとなれば勝ち負けに一喜一憂することもありません。今年は最後の最後まで一喜一憂させてほしいものです。

（住職）

【発行】
真宗大谷派
上宮寺
昭和区白金一丁目十九番十五号
☏052-871-0547